

<全体分析>

試験時間 60 分

解答形式

記述式・論述式

分量・難易(前年比較)

分量 (減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加)

難易 (易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化)

昨年度は、従来の記述式・選択式に加え論述式(40字)の設問が2問出題されて出題形式に変化が見られた。

今年度も昨年度と同様に、論述式(40字)の設問が2問出題された。総設問数は記述式40問、論述式2問の合計42問で、昨年度と変化なし。昨年度に2問あった選択式は出題されなかった。全体の難易度は、昨年度からはやや易化した。

出題の特徴や昨年度との変更点

空欄補充と单答形式の記述問題が大部分を占めるという本学部の傾向は維持されている。昨年度に出題された論述式の問題が今年度も引き続き2問出題されており、今後の出題動向を注視する必要があるだろう。昨年度は「歴史総合」の日本史部分を強く意識した問題文が提示され、それに沿った記述問題と論述問題が1問ずつ出題されたが、今年度ではその色はやや薄まり、日本史部分からは記述問題が1問出題された。

その他トピックス

例年通り、年代を問う設問が出題された。本学部で頻出である文化史の出題は、出題が少なかった昨年度・昨年度よりも増加した。なお、Ⅲ空欄(C)オランプ＝ド＝グージュは2025年度「早慶レベル模試」で、Ⅳ空欄(J)儒林外史は直前講習「早慶大世界史テスト」で出題しており、ズバリ！的中であった。

<大問分析>

番号	出題形式	出題分野・テーマ	コメント(設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
I	記述式 論述式	動力源の歴史 (古代～現代)	設問(1)「タンギー爺さん」からゴッホを導けなかった場合は、「オランダ」「ポスト印象派」から推測したい。自由将校団を問う設問(4)は今年度で唯一の第二次世界大戦後史で、やや細かめの用語ということもあり差がつくポイント。設問(5)ラメス2世がアブシンベル神殿を建設させたエジプト王であることは、見落としがちなポイント。設問(ア)労働者に団結権・団体交渉権が認められたことと、労働運動の活発化を並記すればよい。	標準
II	記述式 論述式	大モンゴル国と その継承国家	慶大文学部志望者であれば、空欄(C)カーブル、設問(4)チャルディラーンの戦いは正解したい。設問(3)いわゆる定番ではない切り口でメメト2世が問われた。2022年に始まるロシア軍のウクライナ侵攻に絡めて、クリミア半島の歴史を掘り下げていれば登場するテーマである。設問(5)「1919年にはイギリス軍による市民虐殺」「パンジャーブ地方」を手掛かりにした受験生が多かったと思うが、アムリットサールがシク教の総本山であることも押さえておこう。設問(ア)マンサブダール制という用語自体は標準レベルだが、制度の内容の抽象度が高いため、的確な説明をするのに苦戦したのではないだろうか。	標準

III	記述式	女性の権利をめぐる歴史(近世以降)	空欄(C)オランプ=ド=グージュ、カルティニからジャワ島を導く空欄(F)、空欄(J)平塚らいてう、の3問が女性の権利というテーマ史に関わる設問。空欄(F)はカルティニがインドネシア(オランダ領東インド)出身であることから島を判断するが、スマトラ島などジャワ島以外の候補もあるため、難しい。空欄(J)平塚らいてうは歴史総合で登場する頻出人物である。なお、オランプ=ド=グージュは今年度の慶大商学部でも出題された。	標準
IV	記述式	儒学関連史(戦国時代～清)	『枕草子』に関するエピソードから白居易を問う空欄(G)は難問。科挙制度の功罪というテーマにおいて空欄(J)儒林外史は頻出である。それ以外の設問は概ね平易であったが、記述式であるので、歴史用語を漢字で正確に書けるようにしておこう。	やや易

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

＜学習対策＞

論述式の設問が2年連続で出題されたため、論述式の対策が来年度に向けても必要になってくるであろう。今年度は「歴史総合」からの出題は記述式1問だけであったが、出題量の増加も想定して抜かりなく学習を進めておきたい。「世界史探究」は、まずは早めに通史を習得するという前提のうえで、①年代を問う設問、②中国史(漢字の記述)、③文化史、という慶大文学部で頻出のポイントを固めていくことが肝要である。